

学びのたより

2023. 9. 1

文責/JUN

「働き方改革」と「ときめき」

1 教師の多忙さと「働き方改革」

教師の仕事が注目されている。

ただ、注目のされ方が、ポジティブな面であったらよいのだが、どちらかと言うと、ネガティブな面に向けられているのがつらい。もっとも懸念されるのは全国的な「教員不足」だろう。それは、教員になろう、教員になりたいと思う人が減少しているからで、そう考えると解決は簡単ではない。教師という仕事への魅力が高まり、教員になりたいという機運が醸成されるようにしなければならないからである。そう考えると、「教員不足」対策の本丸は教師の仕事の魅力化だと言える。

教師の仕事への魅力を削いでいる原因の一つは「多忙さ」だと言われる。しかし、忙しいのはこと教師に限ったことではない。それに、学校に勤めていたころ、忙しいから教師の仕事をやめたいと私自身思ったことがない。多忙さイコール魅力の無さではないのだと思う。

教師は、何よりも、日々、担当する子どもへの対応に心を砕かなければならない。何人もいる子どもは一人ひとり異なる存在だ。しかも、その一人ひとりもその日、その時によって状況はさまざまに変化する。そして、子どもへの対応で最も多くの時間をかけるのが授業だ。授業をするには、教師の学習材に対する見識が問われる。だから学習材研究を怠ることはできない。そして、その学習材と子どもが相まみえる授業では、その場で、学習材と子どもとの間でどういうことが生まれているかを察知し、その事実即して、学びが生まれるように持っていかなければいけない。しかも、そのことによって子ども一人ひとりに学びが生まれるように。

教師の仕事の中心はここにある。そして、それは、極めて創造的・建設的な働きを必要とする。そのための力量を養おうとすると、どれだけ時間があっても足りないという気持ちになる。だから、多忙にならざるを得ないのだ。

ところが、多くの教師は、この多忙さには後ろ向きではない。そもそもこの多忙さに嫌悪感を抱く人は教師に向いていないと言える。子どものことで頭をいっぱいにする、どう授業をしようかと取り組む、それが教師の仕事そのものだからである。子どもや授業への対応によって、心躍る出来事が生まれる、その充実感が、教師である喜びとなる。自分は子どもの学びと成長にかかわっているというやりがいを感じる。そして、教師になってよかったという思いになる。

昨今、「教師の働き方改革」への取り組みがされるようになった。「教員不足」への対策としても、

前述した教師の本務への専念のためにも、歓迎すべきことである。ただ、大切なのは、どこをどう改革するかということである。教師の本務を充実させ、その本務の魅力を深め、教師の仕事の大切さとやりがいを社会にアピールする、そのための「働き方改革」でなければならない。何がなんでも多忙さの軽減だと言って、単に、労働時間を減らせばよいということではないのだ。

2 多忙さへの対策

「多忙さ」への対策で大切なことは、本質的なことへの比重を減らさないで、いかにして非本質的な部分における時間を削るかである。本質的なことへの比重を減らせば、それぞれの学校の教育の質が低下し、一人ひとりの教師のやりがいも窄み、教師としての成長も危うくなるからである。そうなれば、本末転倒である。子どもへの教育が未来社会を創るのであり、質の低下にだけは陥ってはならない。というか、本務である授業づくりや子どもへのかかわりに十分対応できるようにするための「働き方改革」でなければならないのだ。それにはどうすればよいかという発想があるかないか、そこが大切である。

学校内においてやらなければいけないことは、学校のシステムが変化しない限り量的に減ることはない。むしろ、学力向上だとか、主体的・対話的で深い学びだとか、道徳の教科化だとか、ICT教育だとか、いじめや不登校への対策だとか、年々、取り組まなければいけないことは増えている。そのうえ、ここ3年ほどは新型コロナ対策で翻弄されたのである。やらねばならないことは止めどなく姿を現してくる。にもかかわらず、時間外勤務を減らすことだけに取り組むことになったら、教育の質を低下させることになることは必定だろう。

「働き方改革」として時間外勤務だけに焦点が当たった当初は、そういう危険性があった。そのうち、単に時間外勤務をしないようにするというだけでは対策にならないということが分かってきた。だから、休日の部活動を地域移行するとか、雑務を行う教員補助員を配備するとか、解消するための方策が出されるようになった。つい先日には、文科省の中央教育審議会でも検討された対策事項が示された。

このようにいろいろな努力、改善が考えられているのはよいことである。しかし、どれも帯に短したすきに長しになっている。根本的には改善されないからである。

やらなければいけないことが量的に変わらない状況で、そのやらなければいけないことの質を落とさないようにして、教師一人ひとりの多忙さを少しでも軽減するとしたら何をすべきなのだろうか。そう考えると、そのための方策は一つしかないように思われる。教員数を増やすことである。人が増えれば、それだけ一人の教師の負担が減るからである。

人を増やすのは簡単なことではない。それだけ人件費が必要になるからである。つまり、政府や自治体が、教育にかかる予算を増やさなければ、それは実現できないことなのである。教育の予算は、未来への投資である。教育をおろそかにした国は決して発展しない。十分な教育を受けた子どもたちが将来の社会を背負うから国が発展するのである。為政者に、20年後、30年後の社会、国を想定する「先を読むまなざし」があるかどうか、それは決定的に大切なことである。

ところが、そのように考えた途端、はたと困ってしまう。それは、冒頭で述べたような「教員志望者減少」という事態が起きているからである。それをこのままにしておいては、たとえ政府や自治体

が教員増に舵を切ったとしても、増やそうにも増えないというジレンマに陥ってしまう。

そこまで考えると、もっとも大切なのは、今、取り組まれている「働き方改革」だけではなく、教師という仕事がどれほど大切でどれほど魅力のあるものなのかということを広く伝えることなのではないだろうか。それには、ネガティブな面よりも、ポジティブな面の事実を、こんな素敵なお仕事があるのだ、教師の努力でこんな出来事が生まれるのだというように、知ってもらうようにしていく必要があるのではないだろうか。

3 魅力化への対策

どういう職業に就こうかと考えるとき、人はどういうことを判断基準とするだろうか。もちろん、それは人によって異なるけれど、ある政党で話題になった教職調整額増額のようなどれだけの賃金をもらえるかも一つの基準にちがいない。もちろんそれは調整額よりも本俸だと思うが、このことについての対策が必要なのは言わずもがなである。

しかし、それ以上に大切なことがある。それは、教師の仕事に魅力が感じられるようにすることである。つまり、教師の仕事はやりがいがある、教師として子どもたちの成長と学びに携わってみたい、そういう期待感とか憧れが生まれるようにしなければならないのだと思う。そういう期待感や憧れのない人が教師の仕事に就いても、教師であることの充実感は生まれず、それが結果的に子どもによくない影響をもたらすことになるかもしれないからである。だから、もっとも大切なのは、前述したように、教師の仕事の魅力や大切さが社会全体に広がることである。冒頭、教育が注目され出したことについて「注目のされ方が、ポジティブな面であつたらよいのだが」と述べたのはそういう思いがあるからである。

7月のことだった。ある教員養成大学の先生からの依頼で、70人にもなる大学生の講座にオンライン参加をした。大学の先生が、その日までに、私の著書をもとに講義をされていて、その講義を受けた学生からの質問に私が答えるというのがその時間の企画だった。

講座が始まると、私が著書に記している実践例を取り上げ、そのことについての詳しい説明を求める学生が何人かいた。それに対して、私は、その時どんなことが起きたのか、そして、その出来事を巡って子どもと教師でどんなやりとりがあつたのか、臨場感を持ってもらえるよう話したのだった。

そのうち、一人の学生から「教師になろうと志したのは、どんなことがあつたからですか」という質問が出た。そのとき、私の頭にひらめいたのが「教員不足」だった。この教室にいる70名の若者は教員養成大学の学生である。だからこの人たちの一人でも多く教職に就いてもらいたい、そういう思いがふつふつと湧いてきた。こうして私は、私が自ら望んで教師になつたことを熱っぽく語ることになつたのだった。

私の属する「東海国語教育を学ぶ会」で月例会を開催している。そこには、30～50名の教師たちが自主的に参加していて、ビデオ映像をもとに授業や子どもの学びについて考え合っている。そこに、ある大学の先生が参加してくださっているのだが、その先生が最近、学生を同行してくださるようになった。例会では、大学の先生も学生も同じ参加者として自由に発言してもらっている。その様子を

見ている、これから教師になろうとしている人が、授業を見て、協議に参加し、先輩教師の話に耳を傾ける、これはとてつもなく素晴らしいことだと思った。

けれども、それは、どこの大学でも行われていることではない。

ある学校を訪問したとき、その学校とは別の学校の若い教師が何人か参観に訪れていた。その教師は、私が訪問した学校の授業を参観し、その授業をめぐる協議に参加し、その後の1時間ほどの私のコメントを聴いてくれたのだった。それから数日後、参観した若い教師の学校の校長からお礼の電話をもらった。その際、その教師がこんなことを語っていたと伝えてもらった。

「授業を見て、石井先生の話聴いて、目が覚める思いになった。授業づくりで何が大切なことなのか、初めて知った。大学にいるとき、こういうことを話してくれる先生はいなかった」

この三つの事例は、私にオンラインでの参加を要請した大学や、教師の研究会に学生とともに参加してくれる大学があるかと思うと、旧態依然としたことしか講義していない大学もあるということを示していた。この違いは、「教師になりたい」と思えるかどうかの大きな違いにつながるにちがいない。「教員不足」の解消は、現場の学校や自治体の努力に負うだけでなく、むしろ、これからの教員を育む大学が担わなければならないことなのではないだろうか。

けれど、それは、「教員不足」対策を教員養成大学だけに押し付けることではない。私が言いたいのは、子どもの教育にかかわるさまざまところから、もっともっと教師の仕事の大切さと魅力を、社会全体に発信するべきだということである。社会全体が、子どもの教育こそ未来の社会をつくるのだ、その大切な仕事をする教師という仕事にはそれだけの価値があるのだという考え方を広げるべきなのである。

教師の増員は、ただ人を増やせばよいということではない。このことを、肝に銘じないと、これから先の学校教育は危うくなるにちがいない。

4 仕事への「ときめき」

人が自らの仕事に魅力を感じる時とはどういうときだろうか。

私は、やらされるのではなく、自らの意思で取り組んでいるときではないかと思っている。もっと言えば、決められたことを決められたようにやらされているときには、ノルマをこなすことにしか意識は行かないのだけれど、難しいことであっても、失敗したりすることがあっても、ここがだめだったのではないだろうか、それならこうしたらどうだろうというふうに自らの意思で取り組んでいるときは、どれだけしんどくてもそれは愉しさにつながっているのだと思う。

教師の仕事は、決められたことを決められたようにやっていると務まらない仕事である。どういう反応を示すかわからない子どもに対して、その場の判断に基づいて行わなければいけないのが教師の仕事だからである。難しいけれど、これほど楽しいことはない。ましてや、うまくいったときの輝くような子どもの顔に接すれば、もうそれだけで満ち足りた気持ちになる。

決められたことを決められたようにするのではなく、自らが創り出す仕事、そこに存在する人間の気持ち、それを私は「ときめき」だと思う。人は「ときめき」を感じる時が最も幸せになれるので

はないだろうか。

教師の仕事にはその「ときめき」がある。授業をつくるにも「ときめき」、子どもの分からなさや間違いから学びを生み出すときも「ときめき」、思いもしない子どもの考えに出会い「ときめき」、子どもと一つになって感動することに「ときめき」、自らの壁を超えようとする瞬間に「ときめく」。

それは、教師であることへの「ときめき」だと言える。

私は、「外部助言者」としていろいろな学校を訪問し、授業づくり、学校づくりについて、それぞれの学校の先生方を支援する役割に就いて20年になる。この20年にたくさんの教師と出会い、たくさんの授業を参観し、教師や学校の実践に触れてきた。その年月をふり返ってしみじみ思うのは、教師や学校の実践は、教師たちが「ときめき」、子どもたちが「ときめき」そしてそれらの営みを参観する私も「ときめく」、そういう事実で満ち満ちているということである。

夢中になって考える子どもの顔、額をくっつけるようにしてペアで考え込む二人、何分も考えた末の気づきで一瞬にして生まれる輝く笑顔、みんなの考えをつなぎ合わせて怒涛のように深まっていく教室の揺れるような空気感、そういう場面を私は数えきれないほど見てきた。

一方、そういうドラマは教師にも生まれている。どういう授業をすればよいのか、何度も何度も書き直してデザインをつくる教師の意欲、何か月もみんなの前で話すことができなかつた子どもから声が出た瞬間に滲んだ教師の涙、体がこすり合うほど子どもたちに囲まれて笑顔爆発の教師の顔、難問に互いの気づきを出し合い聴き合って取り組む子どもたちをじっと見守る慈愛に満ちた教師のまなざし、そして、自らの想定を超える子どもの発想への感動を子どもたちの前でそのまま表出したときの子どもと教師の一体感。

こうした「ときめく」瞬間は、いくつもいくつも、毎日のように、多くの教室で生まれている。私と授業とのかかわりは、自分に教室があったころから数えるともう58年にもなるのに、こういう瞬間に出会うと未だに「わくわく」「どきどき」する。こういうドラマのような出来事は次々と生まれてくる。子どもと教師の生み出す宝石のような出来事は無尽蔵だ。そう思うから、私の教室行脚に終わりが無いのだ。

しかし、私が感じている「ときめき」、そしてそれがどんなに魅力あふれるものであるか、そのことを学校関係者以外で知っている人はどれほどいるだろうか。つまり、わたしが述べている授業という世界の「ときめき」は、世間一般にはそれほど伝えられていないのだと思う。

私は、一時期、教育委員会事務局勤務を経験した。そのとき、市役所のさまざまな部署の人と接した。部長会議にも出席した。そこで感じたのは、教師としての自分の感覚との異なりだった。それは、そのまま、教師の感覚はなかなか理解されないジレンマになった。

市役所の読書活動に関する会議で、私が「子どもの読書を進めるということは、子どもの息遣いを感じる事だ」と述べたのだが、「息遣い」と言った瞬間、「くすっ」と笑った委員がいた。子どもとのかかわりにおいて「子どもの息遣いを大切にする」と言ったのだが、その委員にはそういう感覚はないのだと分かったのだった。

これは、一つの例だが、「ときめき」ということも同じように一笑に付されるかもしれない。それは、大人同士のかかわりにおいては「息遣い」とか「ときめき」とかいう人間的・情緒的なことが薄

れているからかもしれない。

しかし、教育の世界では、極めて大切なことである。だから、その大切さは理解されないとあきらめるのではなく、伝えていかなければならないのだと思う。本稿で述べているのは「教員不足」に対する「教育の大切さ魅力」を広く伝えていくことについてだが、それは、一人ひとりの子どもに対する極めて人間性あふれる行為であることを考えると、一般社会が忘れてしまっているかもしれない「ときめき」とか「息遣い」を大切に、子どもの育ちと学びに対して真摯に心を砕いて取り組む教師の姿を伝えていくことがなんとしても必要なのではないだろうか。

それを実行しなければいけないのは、教育にかかわるすべての人たちだろう。そして、マスコミも、問題視されている学校の状況や教師の不祥事だけでなく、その一方で、教師たちが、どれほど子どもに対して、学びに対して真摯に「ときめき」を抱きながら取り組んでいるかという実像も伝えてくれるとよいと思う。

「教員不足」への対策で最も大切なことは、若い人たちに対してはもちろん、どんな年代であろうと、社会の人たち皆さんにこの「教師であることの『ときめき』」を知ってもらうことである。そのための努力をしないで、ただ、「時間外勤務が減りそんなに多忙ではありませんよ」というような宣伝をしたり、ただ採用試験を早めたりするというようなことだけをしていても本質的な対策にはならない。

教師はこんなときにこのような「ときめき」を感じて仕事している、そういうポジティブな出来事を発信するようにしなければ、若い人たちに「教師になりたいという『ときめき』」は生まれません。そのことを、現場の教師も、教育委員会も、自治体も、国も、大学の先生たちも持たなければならぬのではないだろうか。

教師の「働き方改革」を、教職に対する「ときめき」が減退するようなものにしてはならない。もちろんそれは、多忙化している教師の働き方がそのままよいということを行っているのではない。時間的なものも改善してもらわなければならない。そうでなければ、子どものことや学習材のことに打ち込める時間が十分にとれないのだから。

学校教育が子どもの育ちと学びの深まりのためのものであることを考えれば、教師の働き方を改革するとは、教師本来の仕事に取り組めるようにするためのものでなければならない。つまりそれは、教師の仕事が魅力的にするということである。子どものこと、子どもの学びのことで頭をいっぱいにし、「ときめき」を感じて仕事をする、そういう教師像を目指せるようになるということである。

「働き方改革」がそのようなものになれば、教師の仕事が魅力あるものとなり、そのことが社会全体に伝わる。そうなれば教師志望者も増える。

そうしていけるかどうか、それがいま、問われているのではないだろうか。